神話・三浦朱門

著者紹介

1926年　東京に生まれた
1948年　東京大学文学部言語学科卒業
1955年　短篇集「冥府山水図」（筑摩書房）刊行
1960年　長篇小説「セルロイドの塔」（文芸春秋新社）刊行
1961年　短篇集「実子」（新潮社）刊行
現在日本大学芸術学部助教授

神話

昭和四十一年三月十日第一刷発行
著　者　三浦朱門
発行者　野間省一
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　有限会社文信社
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽町三ノ一九
振　替　東京三九三〇
電　話　東京（942）一一一一（大代表）
定　価　四八〇円
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

©三浦朱門　昭和四一年　Printed in Japan

目次

偕老同穴　7
神話　51
洋服箪笥　87
猫　119
師弟　149
ピーター・パン　229

装幀・栃折久美子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

三浦朱門作品集

借老同穴

一

自分の事務所のドアの前で、和泉正利はちょっと立ち止った。あまり気のすすまない会合に出る時の、心の動揺に似たものを感じたのだ。会合と事務所とは違う。会合には微笑で目礼しあっても、唾を吐きたいくらいいやな奴がいくらでもいるのに、事務所にそんな人間は一人もいない。

彼の相棒で、一緒にこのデザイン工房を経営している伊藤喜一郎。経理や庶務を頼んでいる片山という若い青年。あとはスケさん、カクさんと渾名で呼ばれている二人の娘が、和泉や伊藤に言われた通りにポスターカラーを塗ったり、字を書き入れたりしている。スケさんの菅野淑子の方が古く、スガさんと呼ばれていた所に、菅井加津江という娘が入って来た。こちらは混同をさけるためにカズさんと呼ばれていたのだが、事務所に出入りする製薬会社の宣伝部員が聞き違えたのがもとで、スケさん、カクさんになってしまったのだ。

伊藤は十年来の同志だし、事務所の人も数年間一緒に働いてきて、気心の知れたものばかりである。それにもかかわらず、和泉はあえて勇気をふるい起さなければ、事務所に入って行けない自分を意識した。戸を明けなくとも中の光景が目に見えるのだ。窓硝子から日がさしこんで、鋏やセルロイドの定規や、ケント紙の反射が、白い天井に濃淡さまざまな影を映している。伊藤は机の上にお茶とビタミン剤の瓶を並べて仕事にかかる準備をしているだろう。

実際に戸をあけてみると、伊藤はまだオーバーを着たまま、カクさんの書きかけのポスターの上にかがみこんでいた。和泉の方にふり向くと、

「コレクションという字の色だけど、これじゃちょっと重苦しかないかな。」

「うん。新しいドレスのコレクションじゃなくて、鉱物標本のコレクションみたいだな。それより、昨日のゴルフボールの箱だけど、変にいじって、箱をさげて歩けるようになんかしない方がいいな。あれはバラでポケットに入れている方が、スポーティじゃないか。」

「それもそうだ。」

伊藤はオーバーをぬぐと、机の引出から、彼の言う朝食がわりの、薬瓶を幾つかとり出した。カクさんがお茶を入れてくる。いつもより肝臓の薬が多いようだ。

「昨夜そんなに飲んだのか。」

「うん。それより、奥さんとケンカでもやって来たのか。いささかグロッキー気味だぜ。」

「いや、今日は何だか仕事がいやでなあ。あきちゃったのかな、もう。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「大金持の心境だね。おれのような独り者には、お前がどうやって、税金を払って、妻子をくわしてるか、じっくり聞きたいもんだ。」

伊藤はそう言ってニヤリと笑い、一握りの薬をのみはじめた。お茶でむりやりに食道に流しこむと、胸をたたく。

「君がさ、そうやって、胸をたたくのを、昨日も一昨日も、その前もみた訳だよ。」

「しかし十年前は、薬なんかいらなかった。第一、金がないもんな。そんなのが気になるのは、スランプなんだよ。倦怠期という奴さ。今日は仕事を早仕舞して遊ぼうや。」

しかし事務所へ出てしまえば、なかなか早仕舞という訳にはいかなかった。今日中に片付けなければならない仕事もあり、電話や来客もある。和泉は早仕舞という約束を忘れたのではなかったが、二時すぎると、もうあまりあてにしていなかった。気が進まないながらも、トレーシング・ペーパーの上に、軟い鉛筆で、グラビヤ頁の割付の下絵をかいていると、隣の伊藤の机でパチリと鉛筆を製図台に置く音が聞こえた。

「さ、やめた。帰るぞ。後たのんまっせ。おい、和泉、行こうや。」

伊藤はガレージへ行くのかと思ったのに、そうでもない。そしてタクシーをとめるでもなく、ぶらぶら御茶ノ水の坂を登り出した。彼等は小川町の小さなビルの一室を借りているのである。

伊藤は自分で切符を二枚買い、先に改札口を通ると、和泉の方に顎をしゃくった。

「どこへ行くんだい。」

「黙ってついてくりゃいい。」
下り電車の中で、二人は雑談とも仕事の打合せともつかない話をとぎれとぎれにした。伊藤は人目をひく女が乗ってくると、それとなくそちらの観察を怠らない。そういう時、下唇がつき出て、ふてぶてしい、しつっこさが頬から顎にかけて、にじみ出てくる。彼は女にかけては、ブルドッグのように強引だと聞いている。和泉は男だから、彼のそういう面を知らないが、下唇をつき出した彼の顔を見る度に、その噂は本当だろうな、という気がするのだ。
和泉に対しては、伊藤はさっぱりして、つき合いよい仲間だった。二人で一つの仕事をする時でも、意地になって自分を主張することはしなかった。それだからこそ、今まで十年も、一緒に仕事をしてこられたのだ。
新宿をすぎても、伊藤は腰をあげる気配はない。荻窪へ行くのかな、と和泉はふと思った。二人がはじめて会ったのは、荻窪の駅前の屋台の飲み屋だった。伊藤はその頃、中学の絵の教師をし、和泉はつまらない雑誌の編集部で、写真のレイアウトや、カットを画く仕事を担当していた。
和泉が会社の帰りに、その屋台によってみると、
「おばさん、このお銚子と盃とおつまみの皿の間隔のほどのよさ。ね、お銚子をこう傾けると、ちゃんと下に盃がある。これがビール瓶だったら、こうはいかないね。持つ。向うへこぼれる。あわてて手を引く。隣の人にぶつかる。ね、ざまが悪いよ。こんなちっぽけな店

で、一人で飲むなら、お銚子だね。この広さ。お銚子や盃の大きさ、おばさんの並べてくれる位置のよさ。これを機能美っていうんだよ。ジェット飛行機ね、あれと同じ精密な計算がおばさんの長年の経験の中にあるんだな。」

と誰も相手にならないことを、目をとろんとさせてしゃべっていたのが伊藤だった。はじめは彼にからまれるのが迷惑だったが、和泉もアルコールが廻ってくると、次第に意気投合し、二人とも同じような野心を持っていることを知ると、親友になった。

自分の雑誌に世話して、伊藤にアルバイトをさせたのが皮切りで、次は伊藤が和泉の仕事を探してくれた。お互に相手を引き立てながら、デザイナーの仲間入りをして行くうちに、一緒の仕事場を持てば、電話も一本で済むし、仕事が一人に沢山来た時は、相手が、今のスケさん、カクさんのような、手伝いもできるし、といったことから、二人は共同で工房を作った。勤めをやめて、デザイナーとして独立した頃は、競争心も激しくなってきて、工房としては最大の危機を迎えた。しかしお互に、工房を解散する経済的な自信がなかったので、がまんしたのである。それから後は惰性だった。今では工房を法人にしておいた方が、税金の面で楽だから、二人のコンビは続いているのである。

伊藤も倦怠期なのかもしれない。荻窪へ行って、二人が出会った場所——その飲み屋はずっと以前に潰れてしまっていたが——へ行ったり、昔、部屋借りしたあたりでも散歩して、気分を新たにするのだろうと和泉は考えた。

しかし荻窪をすぎても、伊藤は動かない。

「切符見せろよ。」
「ま、いい。おたのしみ、おたのしみ。」
「おれ達、仕事というけれど、本当にいい仕事をしようと思って、ある程度、実行したのは、お互が勤めをやめた頃だぜ。」
と和泉がしばらく二人の間に話がとぎれた時に言い出した。
「ふーん。何だか美術青年みたいなことを、言うねえ。」
「そうだよ。夜おそくまで君と議論して、喧嘩わかれをするかなと、本気で考えた。」
「うん。おれだって、自分の個性を生かすか、もうしばらく様子を見るか、悩んだもんだ。」
「そして今じゃ宣伝パンフレットとPR雑誌の委託加工場になってる。」
「うん。その通り。金をもうけるために、バタクソ働いてる訳だ。これでいいんだろうか。人生って、そんなもんだろうか。」
伊藤は芝居がかった声でそう言い、笑い出した。和泉も苦笑した。
立川につくと、伊藤は立ち上った。
「乗りかえ。」
和泉はもう何も言わずに、伊藤の後について行った。
青梅線で御岳へついた頃は、日がかなり傾いて、谷間にある駅のまわりの部落はもう日蔭になっていた。
「おい、今からハイキングか。」

「黙って、ついてこい。」

駅からちょっと歩いた所に、御岳の山頂へ行くケーブルカーがある。発車まで数分の余裕があった。上の部落から通学しているらしい女の高校生が一人乗っているだけだった。やがて生ぐさいブリキカンをかついだおばさんが、ケーブルカーをゆらりとさせながら、乗りこんで来た。

駅員が笛を吹き、戸を乱暴に締めると、ケーブルカーは身震いを一つして登りはじめた。急に首のまわりが寒くなってきた。外を見ると、白い物が岩蔭にある。

「雪だよ。」

「それを見に来たのさ。」

下の御岳の町では雪は一かけらもなかったし、見廻した所、山に雪があるとも思えなかったのに、ケーブルカーの左右は次第に白くなっていった。

「二三日前、ちょっと東京でみぞれが降ったろ。あれが、この辺じゃ雪で、それが一週間くらいは消えないんだ。」

伊藤の東京で、という言葉は、ここがまだ東京都だし、都心から電車で二時間も走っていないことを思うと、おかしかった。

終点で、高校生とおばさんは、神社をとりかこんだ山頂の部落の方に歩いて行った。雪は三十センチほどの深さだった。伊藤は部落と反対の展望台の方へ歩き出した。展望台からは東の方が一目で見渡せた。東京の空はオレンジ色の雲にかこまれて、その下に紫色の沼のよ

うに、夕闇がわだかまっている。それは八百万の人間と百万の自動車が吐き出す毒気のようにも見えた。

「晴れた夜はきれいだろうな。」

和泉はそう言いながら、有料の望遠鏡に近よったが、そこにも雪がつもっていて、十円玉を入れても、機械が作動しないように思えた。

「さっきの話だけどさ。今、解散したって構わないのさ。本当の仕事をするためにね。そのかわり、PR雑誌の編集のようなことはできない。いいんだよ、己はどっちだって。投げやりで言うんじゃない。六七年前と違って、今なら、別れても、お互に何とかやっていけるだろう。」

「いや、別れようと言ってるんじゃない。ただ……。」

「事務所へ入る時、二日酔みたいな感じがするんだろ。己もそうさ。引越そうかな、と考えたこともある。車を運転して通ったり、バスに乗ったり、地下鉄を利用したり、とにかく、工房へ行く道順を変えようと苦労してるんだ。倦怠期さ。夫婦なら、こういう時どうするんだ。己は結婚してないから、わからんのだが。」

「ガマンするんだね。夫婦の場合は。」

和泉は夫婦と事務所の人間関係は全く違うように思って、そのことを考えているうちに、伊藤が、

「じゃ、スケさん達に、もっと短いスカートで来て貰うことにするか。いや、彼女等はショー

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com